

---

# 約束～天使より墮天使～

嵯峨野斎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束〜天使より堕天使〜

### 【Nコード】

N7676Y

### 【作者名】

嵯峨野斎

### 【あらすじ】

近藤優雄、十七歳。主人公である彼は小さい頃からいじめを受けてきた。高校生になってからも続くいじめに無気力な生活を送っていたが、ある日転校生に会った事でその生活は終わりを告げる。

注：前半はいじめについての表現があります。不愉快になられましたら申し訳ありません。――<ペコリ「読みたくないわあ！」という方がおられましたら、お戻りくださいませ。

1 美人な転校生に抱きつかれました。・・・なぜだ。（前書き）

以前『夢よ現実に』を書いていたときにチラツと載せようか迷っていた小説です。かなり前に書いた小説ですが、一応完結しているので、載せます。ってか『夢よ現実に』の番外編を書く、とか言いながら何してんねん！と自分で思いますが、全然はかどないんだもん！！（泣）

話の内容は頭の中にあるのに、なかなか形にできない・・・。やっぱ仕事忙しいからか・・・（言い訳ですね、ハイ）

とにかく毎日更新を目指して頑張ろうと思います（はよ番外編書けや自分）

## 1 美人な転校生に抱きつかれました。・・・なぜだ。

『約束しよう。生まれ変わったら、君と共に生きていく事を』  
そう言つて、目の前にいる誰かに手を伸ばす。その手には剣が握られていた。

『それまで君を一人にする事を許してくれ・・・』  
頬に熱いものが流れ落ちた。ああ、自分は泣いているのだと気付いた瞬間、向こうから笑つたような気配を感じて・・・

ピ。ピ。ピ。ピ。・・・

眼が覚めたら、そこはベッドの上だった。けたたましく鳴り続ける目覚まし時計をバンツと叩き、隣に置いてあつた眼鏡を持ち上げる。

「夢か・・・」

ボソリと呟いた声は少し湿っているような気がした。

ふと頬が冷たく感じて、手をやると涙が流れていた。夢の影響だろう。

「変な夢だったな・・・」

寝癖も相まってボサボサの髪をかき上げながら、彼、こんどつまさかず近藤優雄は起き上がった。

優雄は十七歳、高校二年生だ。父子家庭で、母親は早くに亡くしている。父は仕事で海外に単身赴任中なので、今はほぼ一人暮らし。昔から家事は優雄の担当だったので、苦ではない。

ただ一つ、優雄が苦にしている事は・・・

「学校か・・・」

溜息と共に吐き出されたのはどんよりと暗い声。

のろのろと身支度を整えながら、食欲もないので牛乳を胃に流し込む。

「休んじゃおうかな・・・」

朝が来るたびにそう思うものの、真面目な性格がそれを許さない。やはり今日も、憂鬱な気分で家を出た。

重い足取りで着いた学校。

友達同士で仲良くお喋りしながら歩いていく生徒達が多い中、優雄は鞆を胸に抱いて目立たないように下駄箱へ向かっていた。俯き気味に歩いているせいで少し猫背になっている。

上靴に履き替えようと腰を屈めた時、突然ドンツと背中を押された。

「あ、いたの」

見上げると同じクラスの子がクスクスと笑いながら通っていくところだった。

「・・・・・・・・」

優雄は何も言わずに靴を履き替える。

こんな事は日常茶飯事だ。もう慣れている。

そう自分に言い聞かせ、教室に向かう。今日は上靴が無事下駄箱の中に入っていた。だから今日はまだ幸せな日かもしれない。

ざわつく教室に辿り着くと、自分の席まで脇目も振らず急ぐ。周りはみんな自分達のお喋りに夢中だ。そう思っていたが、突然足下に何かが飛び出して躓いてしまった。転んだ拍子に眼鏡がどこかに飛ぶ。

「何やってんだよ」

無様に転んだ優雄を、大笑いするクラスメイト達。特に足払いをかけた男子はニヤニヤと意地悪く笑っていた。

優雄は無言で眼鏡を探し、かける。

反抗すれば余計楽しませると分かっているのに、何もなかったように鞆を持ち直して席に座った。クラスメイト達はそんな自分に興味を失ったのか、またお喋りに興じる。

ここでの優雄はいつも一人だ。誰も話しかけて来ないし、こつちから話しかけようとしてもしない。唯一話しかけてくるのは昼休みの始まりの時だけ。要は程のいいパシリで、昼食を買いに行かされるのだ。最近は昼休みになると同時に屋上に逃げ込むので、お金を払わずに済んでいる（その後の文句はいつもの事だ）。

俗に言う、いじめだ。

小さい頃からずっと苛められてきた。今はほとんど無視されている状態だが、小学校や中学校の頃はもっと酷かった。仲間はずれは当たり前で、学校の行事でも組まされる相手が嫌がって、終いには先生まで諦めて放置した。優雄の持ち物は壊され捨てられるか、手元に戻っても落書きだらけ。一部の男子からは持て余した力の捌け口にされていた。一時期登校拒否を起こしかけた事もあったが、仕事で忙しい父に心配をかけたくなって相談も出来なかった。

これまで優雄を育てるために頑張ってきた父。母親がいない事で寂しい思いをしないようにと頑張っていた姿を見てきた優雄は、どうしても話を切り出せなかった。いじめの原因の一つが、母親がいない事だったために。

だから優雄はずっと無関心な態度をとり続けた。いつも俯きがちになり、視力が悪いためにかけている眼鏡も相まってクラスメイト達はみんな優雄の顔すら覚えていないだろう。

そんな毎日が続いていく。そう思っていた。・・・今日までは・・・。

チャイムが鳴り、みんなが席に着いて先生がやってくる。その後出欠の確認を終えて出て行くのが日常だったが、今日はいつもと違った。

「転校生を紹介する。華岡はなおか薫君だ」

そう言つて黒板に書かれた名前に、派手な名前だな、と優雄は思った。ドアを開けて静かに入ってくる女の子の容姿も、地味とはい難かった。

外国の血が入っているのか、金髪碧眼、彫の深い顔立ちだ。だが不思議と、どこの国の血か分からない雰囲気は彼女にはあった。誰もが羨みそうなプロポーションのとれた身体は、そこにいるだけで場が華やぐ。輝くように手入れされた髪は腰まで長く、手で梳きたい衝動を覚えるほど柔らかに波うっていた。

「・・・？」

優雄は首を傾げた。

今まで彼女に会った事はない。こんな美人なら、一目見ただけで記憶に残りそうなものだ。だが昔、どこかで会ったような気がする。・・・既視感というやつだろうか。

男子の熱い視線と女子の冷たい視線が集まる中、彼女の方はまるで誰かを探すかのようにキョロキョロと教室内を見回している。やがてその視線が優雄の上に来ると、花がぱあっと咲いたかのように笑った。

「ユウ様！」

教師が彼女について説明しているにもかかわらず、薫は優雄のもとまで一気に走り抜け、抱き付いた。

「うわっ!？」

思わず仰け反ってしまった優雄は、そのまま椅子と彼女ごと後ろに倒れてしまう。

「いてて・・・」

頭を押さえながら起き上がると、彼女は妙にキラキラした笑顔で手まで掴んできた。

「ユウ様！　ずっと・・・ずっと、もう一度お会いしたいと思って  
おりました」

「・・・は？」

つい間拔けな声が出てしまった。

くどいようだが、優雄は彼女に会った記憶はない。だが眼に涙ま  
で浮かべられてはそんな事を言う気にはなれない。

ハッと気がつく、教師やクラスメイトの視線が全て集中してい  
た。

美女と手を繋いでいるという幸福よりも、みんなから少々という  
にはきつい睨みを向けられている事が先行きの不安を上回らせてし  
まった。

昼休み。

速攻で屋上に逃げた優雄は、何故か薫と弁当をつついていた。

「美味しいですか？　ユウ様のために腕によりをかけて作りました」  
そう言って差し出された弁当をパクつく。

最初、貰ういわれもないので断ろうとしたが、彼女が悲しそうな  
顔をするので仕方なく食べているのだ。

「・・・あのさ、何で俺にまわりつくの？　俺、君と会った覚え、  
ないし・・・」

なにせ短い休み時間の度に優雄に声をかけてはひつついてくるの  
だ。男子が声をかけてもつれなく返事をするだけで、おかげで優雄  
は今まで以上にクラスメイト達に睨まれるようになってしまった。

この分では無視されるところか、もつと酷いいじめに・・・

「会ってますよ」

暗い思考に陥りそうになっていた優雄は、彼女のあっさりとした  
言葉にハッとした。

「ユウ様は私を助けてくださいました。命の恩人なんです。だからこうしてまた会う事が出来て、とても嬉しいんです」

「………」

本当に心から嬉しそうに言われて、反論できない。

「私はユウ様のお傍にいらればそれだけで幸せです」

人違いじゃなからうか。

そう思った優雄だったが、彼女は確信を持って言っているらしく満面の笑顔だ。

「……さつきから気になってたんだけど、その『ユウ様』ってのやめてくれないかな。俺の名前は優雄だよ。近藤優雄」

他の人からは名前の漢字の読み方を間違われる事が多く、『まさかず』と読める人はあまりいない。優秀の優なのだから、『ゆう某』だろうと思ってそう呼んでいるのだろうか。

「優雄様ですね。ではこれからはそう呼びします」

……あつさり返された。

やはり人違いだろう。こっちから言っても信じないようだし、彼女が人違いに気付くまで付き合ってみようか。

そう思った優雄だったが、彼女の次の発言にはさすがに引きそうになっってしまった。

「魔法で身体を大きくした甲斐がありました」

「……は？」

本日二度目の間抜けな声。

だが彼女は気にせず続ける。

「優雄様はお忘れでしょうが、私の本来の姿は花の妖精です」

「……へ？」

「あ、他には誰も見ていない事ですし、お見せしましょう」

そう言って、啞然としている優雄をおいていそいそと立ち上がる。  
「解除」

一言そう呟いたかと思うと、薫の身体が光りはじめた。正視出来ないほどの光を放つ薫に、優雄は手で眼をかばう。

「優雄様！」

しばらくして聞こえた、先程より幾分高くなった気がする声に、ゆっくり手をどけると・・・

そこには手のひらに収まるほど小さい薫がいた。背中には虹のように綺麗な色合いの羽が生えている。

「本名はローズと申します」

まさに花の妖精と呼べる姿の薫が、ニッコリと笑いかけてくる。

だが優雄は返事をするところではない。

別にファンタジー好きでもなければ空想家でもない優雄は、目の前の事実についていけなくなった。つまり・・・現実逃避をした。

「優雄様！？ 優雄様！！」

悲鳴のような薫の声を聞きつつ、優雄は失神した。

2 俺の前世はただの人間ではなかったらしいです。・・・信じられるか。

「何だっただんだ・・・」

家に帰ってきた優雄は、晩御飯を作りながら一人ブツブツと呟いていた。

昼休み、眼が覚めた時は薫はちゃんと人間の姿に戻っていて、心配そうに声をかけてくる彼女からつい逃げてしまった。頭の片隅で悪い事をしたか、と思わないでもないが、あの状況では誰だって逃げたくもなるだろう。

その後、いつもより陰湿になったいじめにあつたが（薫につれなくされた八つ当たりだろう、主に男子）、薫の事で頭がいっぱいで普段以上に無関心になっていたかもしれない。

「・・・夢だった。うん、そう考えればいい」

一応の結論を出して心の平穏を取り戻したところで、出来たご飯をリビングに持っていく。席についてさあ食べよう、というところで、ピンポンとインターホンが鳴った。

「こんな時間に・・・？」

時計は七時を指している。こんな時間に訪ねてくる客に心当たりなどない。

首を傾げつつ、インターホンの受話器を耳に当てると、聞こえてきたのは・・・

『こんばんは！ 優雄様！』

先程まで心を乱してくれていた張本人の声だった・・・。

「・・・何でうちに・・・」

『優雄様と一緒にいたいからです』

こんな美女に言われれば誰だって断れないだろうとは思う。が、昼休みのあれが記憶にあるうちは素直に頷く事も出来まい。

「悪いけど、俺忙しいんで・・・」

『だったらお手伝いします！ 家事は得意ですから！』

「いや、別にいいから・・・」

『それに大事な話もあります』

「・・・」

大事な話とやらが何かは見当もつかないが、ここまで必死だところちが悪いような気がしてくる。嫌な予感を覚えつつも、仕方なく優雄は玄関の鍵を開けに向かった。

「で、話って？」

晩御飯を食べるころだった優雄は、薫が持ってきた弁当も併せて二人でご飯を食べていた（薫は優雄と一緒に食べるつもりだったらしい）。

「勿論昼休みの続きです」

続きがあつたのか・・・。てつきり人違いだったと理解して諦めたと思っていたのに。

「本当に人違いじゃないのか？ 俺は君の事全然知らないんだぞ？」  
思わず箸を止めて訊いた。昼にも同じ質問をしたが、「会っている」と言われても全く覚えがない。

「無理ありません。私達が会つたのはおよそ百年ほど前ですから」

・・・薫が言う事は大抵ぶっ飛んでいる。

そう脳裏に刻んだ優雄は食べる手を再び動かしながら黙って聞いていた。

薫は食べ終わって箸を置きながら続ける。

「百年前、優雄様はことは違う世界におられました。そこは天界、

地界、人間界と三つの世界が隣り合っている世界です。天界には天使が、地界には堕天使が、人間界には人間が暮らしているんです」遅れて食べ終わった優雄も箸を置いて、彼女の話当真剣に聞くべきか、と悩みながらもななしに聞く。

「天使は天界と人間界を行き来でき、堕天使は地界と人間界を行き来できました。人間は他の世界には行く事が出来ません。ここまではよろしいですか？」

「・・・ああ」

もうこうなったら自棄だ、最後まで聞いてやろう、と腹を据えた。「そこでのあなたはユリウスという、天使と人間との間に生まれた存在でした」

だから『ユウ様』と呼んでいたのか。

優雄は心の中で思う。

「ユリウス様は天界からの仕事で、人間界で堕天使の監視をしておられました。彼らが悪事を働かないように。彼は誰にでも優しく、気さくな人柄で、人間達から随分慕われておりました。私はユリウス様に助けていただいてからはずっと行動を共にしておりましたので、ユリウス様がどんなに素晴らしい方なのか、よく知っております」

「・・・・・・」

薫の言うユリウスとやらが、自分と同じ人間（天使というべきか？）だとは思えなかった。それだけたくさんの人に慕われる素晴らしい人間だったなら、今の自分とは雲泥の差だ。

「ユリウス様は剣の達人であり、魔法の使い手でもありました。天界でも人間界でも、彼ほど優秀な使い手はほとんどいませんでした。ですが・・・」

眼をキラキラ輝かせて嬉しそうに話していた薫の様子が、突然変わった。

「ただ一人、ユリウス様と同等の力を持っていた堕天使が突如人間界を脅かし始めました。彼の名はアイヴズ。地界の堕天使達を率いて人間界でたくさんの人間を奴隷にしたんです」

「・・・奴隷？」

学校の授業くらいでしか聞かない言葉に、優雄は眉を顰めた。

「堕天使は人間に契約を持ちかけるんです。その人間の望みを一つ叶える代わりに、見返りとして奴隷にさせる契約を。そうすると生き死にも堕天使次第です。寿命は堕天使と同じになりますが、死ぬと命じられれば死にます。そして契約した人間が死ぬと、その魂は生まれ変わる事が出来なくなり、永久に彷徨うようになります。憎しみを募らせた魂はやがて地界に堕ち、理性をもなくして魔獣になっ  
てしまいます」

「魔獣・・・」

聞いた事もない名前だ。思わず呟くと、薫は悲しそうな表情になっ  
て頷く。

「魔獣は人間界に這い出て、人間を襲います。誰かに倒されるま  
で、ずつと・・・」

「・・・じゃあ倒されれば魔獣になってしまった魂は救われるん  
だ  
な？」

いつの間にか真剣に話を聞いている事に気付かず、身を乗り出す。

「ある意味では、そうですね・・・」

「？　どういう意味だ？」

「・・・倒された時点で魂は消滅してしまうんです。まるで存在し  
ていなかったかのように。理性を失っているとはいえ、元は人間だ  
ったわけですから、人間を手にかける事はとても苦しい事・・・  
それから解放されるなら、本人の救いにもなるかと・・・」

「・・・」

優雄は質問してしまった事を後悔していた。そもそも薫の話は突  
拍子もないものだ。信じそうになっていた自分に、無理矢理突っ込  
みを入れる。

（何で俺はこんな話を信じそうになってんだ？ 有り得ないだろ）

頭を振って後悔した事を振り切ろうと躍起になっていると、薫はそれを悲しんでいると受け取ったのか、話を続けた。

「人間界が悲しみに沈む中、それを救ったのがユリウス様です。堕天使から人間を救い出し、アイヴズを封印して人間界に平和をもたらしたのです」

薫の言動からユリウスが英雄視されている事は分かっていた。だが聞けば聞くほどそんなすごい人物の生まれ変わりだとは思えない優雄は、放っておかれていた皿を片付ける事で話を終わりにしようとした。

「優雄様？」

「悪いんだけど、俺疲れてるからさ。今日のところは帰ってもらえるか？」

そう言うのと、薫は申し訳なさそうに頭を下げてきた。それに付られて柔らかな髪が肩から零れ落ちる。

「すいません、そんなにお疲れだとは思わず・・・ではここは私が片付けておきますので、優雄様はお休みになってください」

「いや、いいよ。君も早く休んだ方がいいだろう」

眼も合わせず台所に向かう優雄に、薫は何かを感じたのかそれ以上何も言わずにいてくれた。

変な態度をとってしまった。

静かに帰っていく薫の背中を見送りながら、優雄は溜息を吐く。

薫は何も悪くない。ほとんど自分の八つ当たりだ。自分こそ申し訳ないという思いに、肩を震わせる。

（明日、謝った方が良いかな・・・）

皿を洗いながら、再び大きな溜息を吐く優雄だった。

### 3 初めて墮天使に会いました。・・・黒ずくめだな。

次の日、いつも通り憂鬱な足取りで学校に向かうと、校門を過ぎたあたりで男子生徒が数人たむろしているのが見えた。嫌な予感が出て足早に通り過ぎようとしたが、やはりと言おうか、彼らの視線は優雄に集中した。

「おい、近藤！」

「お前いい気になってんじゃねえぞ！」

「少しは身の程つてもんを教えて」

「優雄様！」

男子生徒の苛立った声を押し退けて割り込んできたのは薫だ。彼らは思わず、といった感で口を閉ざす。

「優雄様！ 早く行きましょう！」

そう言っただけでグイグイ腕を引っ張っていく薫。男子達が声をかける暇もなく、彼女はズンズンとその前を通り過ぎてしまった。

「あ、あの・・・」

「お弁当作ってききましたので、今日も一緒に食べましょう！」

「あ、うん」

勢いに押されて頷くと、彼女の顔に嬉しそうな笑みが浮かぶ。どうやって謝ろうかとずっと悩んでいたが、それだけでホッとしている自分がいた。

「・・・？」

その時、ふと誰かの視線を感じたような気がした。それはまだ啞然としている男子達のものではない。

キョロキョロと辺りを見回していると、

「どうしました？」

薫に声をかけられ、ハッと我に返った優雄は首を振った。今は何も感じない。

「何でもない」

きつと気のせいだろう。そう思って薫の後をついていった。

「見つけたぞ・・・」

そう呟いたのは全身黒ずくめの男。髪も眼も黒く、その背には黒い翼が生えていた。

「待っている・・・ユリウス」

はるか上空に浮かんでいた男は、口の端を吊り上げるとスウッと溶け込むように姿を消した。

「あの・・・ありがとう」

体育が始まる前の休み時間。

みんなに押しつけられた体育委員の仕事で、準備のために体育館倉庫にやってきていた優雄は、手伝うと言ってついてきてくれた薫に頭を下げた。

「いえ、これくらい何でもないですから」

そう言ってボールが入った籠を持ち上げている薫に、優雄は首を横に振る。

「それだけじゃなくて、朝の事も・・・」

「ああ・・・」

薫はニツコリ笑って優雄の前までやってくる。授業で使う用具ばかりが置かれた寂しい倉庫が、彼女の笑みで華やいだ気がした。

「気にしないでいいですよ。あんな陳腐な脅し文句、子供だって怖がりません」

「・・・情けないよな。こんな暗くて気弱で、女の子に守ってもらわなきゃいけない男なんて・・・」

笑いかけてくる彼女をまともに見られなくて、俯き気味に一人ごちる。

こんな情けない男、放っておいてくれればいい。

そう思ったが、薫はふんわり笑って優雄の頬に手を当ててきた。

「優雄様は優しいんです」

「え……？」

「優しいから皆さんに何もしいんです。私は、優雄様のそういうところが好きですよ」

「……………」

違う。俺は弱い。

心の中で、反論してしまう。

彼女が慕ってくれれば慕ってくれるほど、心の中に重しが積み重なっていく。自分はユリウスなんかじゃない。そう叫ぼうとして

「ユリウス」

突如聞こえた低い声に、二人はハッと出入り口を見た。そこには全身黒ずくめの男が立っていた。背中には黒い翼が生えている。

「堕天使……！」

薫の言葉に、優雄は男をジッと凝視した。

（これが堕天使……）

髪が黒ければ眼も黒い。それは日本人と同じなのだが、黒というより、闇と言った方が相応しいかもしれない。

薫が本当の姿を見せた時は気絶するほど驚いたものだが、話を聞いていたせいか彼の人間とは違う姿を見て、どこか納得してしまつた。それは彼が発する威圧感のせいかもしれない。

「あなたがここにいるという事は、あの噂は本当だったのね……！」

「あの噂……？」

優雄が首を傾げると、庇うように立っている薫が小さく頷いた。

「アイヴズの封印が解けたという噂です。本当かどうかは分からなかったのですが」

「その通りだ」

薫の声を遮って、男が一步近付いた。それだけで圧倒されるような力が増したような気がした。

「人間どもはそれを恐れてお前をこの世界へ向かわせたのだろう。ユリウスを連れ戻すために」

「・・・！」

それを聞いた優雄は、自分がショックを受けている事に愕然とした。

薫は人違いをしているのだと自分に言い聞かせていた。彼女の話は自分には関係がない、と。だが彼女が自分と一緒にいるだけで幸せだと言ってくれた時、心の中ではとても嬉しかったのだ。それが根底から覆されて、いじめを受けた時以上に傷付いている自分がいた。

「本当なのか・・・？ 君が俺の前に現れたのは、誰かに言われたからなのか？」

「・・・！！」

薫は何も言わない。それが肯定なのだと感じて、優雄はグッと拳を握り締めた。

「もめているところを悪いが、ユリウスは連れて行くぞ」

「え・・・？」

「連れて行く・・・？」

てつきり殺される、と思っていた二人が呆氣にとられている隙に、男は素早く近付いてきた。

「させない・・・！」

薫は何事かを呟くと、右手を男に突き出した。その掌から、眩い光が何条もの矢となって射出し、男に突き刺さる。

「フン・・・」

しかし男はさして応えた様子もなく、鼻で笑うと虫を払うかの如

く腕を一振りした。

「きゃっ・・・！」

まるで巨人の手に払われたかのように薫の身体が吹っ飛び、バスケットボールが入った籠にぶつかった。音を立ててくずおれていく彼女に、優雄はそちらへ駆けようとした。が、その眼前に立ちほだかった男の威圧感に足が止まってしまう。

「う・・・」

怯えて後退る優雄に、男はいらついたように眉間に皺を寄せる。

「これがユリウスの生まれ変わりか。また弱くなったものだ」

「・・・っ」

どうしてこの男まで自分をユリウスの生まれ変わりだと勘違いしているのだろう。

男の手がこちらに向かってくるのを見ながら、優雄はグッと身を固くした。その時

体育館の方から大勢の声が聞こえてきた。クラスメイト達がやってきたのだ。

「チッ、面倒な事になりそうだな」

そう言つて、男は後ろに下がると闇に溶けるかのように姿を消してしまった。

「・・・・・・」

へなへなと力なく座りこんだ優雄は、散乱しているボールに気付いて慌てて薫を見た。

「だ、大丈夫か・・・！」

腰に力が入らなくて這っていく格好になってしまったが、何とか彼女のもとに辿り着くと頭をそつと持ち上げた。

「大丈夫です・・・」

意識ははつきりしているようだ。

強打した身体が痛いだろうに、こんな時まで笑みを向けてくれる

彼女に、優雄は心底情けない気持ちになった。

自分は何もできず、彼女に守られてばかりだ。弱い自分が恥ずかしい。

思わず俯くと、薫は優しく頬を撫でてくれた。

「優雄様。確かに私がこの世界に来るきっかけになったのは人間達に懇願されたからです。私があなたをお慕いしている気持ちに偽りはありません。あなたが望まなければこのままこの世界で生きていただいても構わないのです」

「でも・・・！」

「私はあなたのお傍にいます。それが私の幸せなのですから」

そう言つて本当に嬉しそうに笑う彼女が愛しく感じられて・・・

優雄は彼女の身体をギュツと抱き締めたのだった。

#### 4 墮天使と対峙しました。・・・無理くね？

「本当に大丈夫なのか？」

学校からの帰り道。

薫が元気になるまで待っていたために辺りは真っ暗になっていた。生徒もみんな帰ってしまったらしく、静かな道を二人で歩く。

何でもないかのように振る舞う彼女に、優雄は何度目か分からない質問をしてしまう。対する薫の返答も同じ。

「もう大丈夫です。魔法で回復しましたから」

「魔法・・・」

よく小説や漫画なんかで聞く言葉だが、実際に見たのは今日が初めてなのだ（昨日も見たがよく覚えていない）。本当に回復しているのか、自分には分からない。

「私、攻撃系よりも補助系や回復系の魔法の方が得意ですから」

あまりにも心配そうな顔をしていたのか、薫にクスクスと笑われてしまった。

「そ、それより、倉庫で会った男だけど・・・」

咳払いしつつ話題転換を図ると、彼女の顔が曇る。

「ミシユレですね」

「ミシユレ？」

「あの墮天使の名前です。アイヴズの右腕とも呼ばれています」

「アイヴズの・・・」

そこまでの力を持つ墮天使がユリウスを狙ってやってきた。だが・・・

「何故俺を殺そうとしなかったんだろう？」

それが二人の共通の疑問。

ミシユレは優雄を殺そうとはせず、連れて行くこととした。ユリウ

スが復活する事を恐れて邪魔するつもりなら、殺した方が手っ取り早いはず。・・・自分でこんな事を思いたくはないが。

「私も不思議に思っております。アイヴズが真っ先に狙うのはユリウス様の生まれ変わりであるあなただと予想はしておりますが・・・。とはいえ、危険な事に変わりありません。優雄様は私がお守りします」

「・・・やっぱり、あいつまた来るのか・・・？」

この時優雄の頭にあつたのは薫がぐったりと倒れていた時の光景。また彼女が怪我をするような事があれば自分は・・・。

「あれ〜？ ネクラじゃん」

聞こえてきたのは男の声でなく女の声。思わず身構えてしまった二人だが、少しホッとして肩の力を抜く。だが相手が誰か分かった優雄は再び身を強張らせた。

「こんな遅くに学校の帰り〜？ 二人で何してたんだか」

相手はクラスメイトの木内響香きうちきょうかだった。優雄を苛めていた中の筆頭である彼女は、クラスのリーダー的存在だ。というより、支配者と言った方が近いかもしれない。

彼女の家は結構な金持ちで、学校にかなりの金額を寄付していると聞く。必然的に彼女に逆らえる者はいなくなり、生徒や教師から一目置かれていた。ただ高飛車な物言いが目立つ彼女に、敬う人間がいるかどうかは不明だが。

「あんたもモノ好きだね。こんな暗くて陰気臭い奴が良いなんて。あたしだったら近寄りたくもない」

矛先は優雄だけでなく薫の方にも向いた。

いつもオシャレに気を使っている自分より綺麗な薫に、嫉妬しているようだ。薫の場合は意識しているわけではなく、基が良いだけなのだが。

嘲笑を顔に浮かべながら木内は続ける。

「二人で駆け落ちでもすれば？ そしたらキモイ顔見なくて済むからさ〜」

キヤハハ、と下品な笑い声を上げて、楽しそうに学校の方へ向かって歩いていった。

「・・・ごめんな」

思わず謝ると、薫はキツと強い視線を向けてくる。

「優雄様は何も悪くないのですから、謝る必要はありません」

「でも、俺のせいで君まで悪口を・・・」

「気にしていません」

そこでニツコリと笑ってくれる彼女に、優雄はついありがとうと礼を言ってしまうようになった。だが彼女はそれすらも拒むだろう。礼を言われる理由もないと。

気恥ずかしくてそっぽを向いていると、視界の端に何かが映った。そちらを見ても今は何も無い。

暗いから何かを見間違えたのだろう。

そう思ったが、何か気にかかる。

変な顔をしていたのか、薫が「どうしました？」と訊いてきた。

「何でもないよ。ただ黒い何かが見えたような気がただけで・・・」

「

「黒い何か？」

「黒猫かも」

「

そこまで言つて、ハツとする。

黒、と聞いて連想されるのは・・・

薫も同じ考えに至ったようで、顔を強張らせる。

「まさか・・・ミシユレ？」

「ですが、私達を襲わないなんて・・・」

「・・・俺達以外の人間を襲う事なんて・・・ないよな？」

「ないとは言いきれませんが・・・」

黒い何かを見たのは今来た道、つまり学校へ向かう方角だ。そこ  
まで考えて、まさか・・・と息を呑む。

「木内さん、学校の方へ向ってたよな・・・」

「・・・！ 急いで追います！ 優雄様は家へお帰りください！」  
そう言つて薫は来た道を駆け戻つていった。優雄が声をかける暇  
もない。

「お帰りくださいって・・・」

女の子が危険かもしれない場所へ行くのに、男が逃げるのか・・・  
？

しかし昼間に味わつた恐怖が優雄の足を震えさせる。

自分はこんなに弱いのに、行つて何が出来る？ むしろ足手まと  
いじゃないか。

そう思つて反対方向へ足を向けたが、一步が踏み出せない。

「・・・っ」

その時頭をよぎつたのは「気にしていません」と言つた薫の笑顔。  
こんな自分の味方でいてくれた、家族以外の唯一人大切な人。  
ただひとり

そんな人を見捨てるのか。

「・・・出来るかよっ、そんな事！」

震える足を叩いて自分を叱咤し、優雄は急いで薫の後を追つた。

もう遅いため閉まつていた校門を、よじ登つて中に入る。そこで  
女の悲鳴が聞こえてきたので、慌ててそちらに向かった。

視界に飛び込んだきたのは腰を抜かしたようにしゃがみ込んでい

る木内と、彼女を庇うように眼前に立つ薫、そして少し離れたところで宙に浮いているミシュレだ。

優雄に気付いた薫が一瞬驚いたように眼を見開くが、すぐに嬉しそうに笑った。

「来てくださったんですね」

嬉しそうにしてくれたのが気恥ずかしくて、優雄は「ああ」とぶっきらぼうに答える。

「木内さんをよろしくお願いします。あいつは私が押さえておきますので」

「分かった」

ミシュレの方を気にしながら木内のもとへ行くと、彼女の腕を引いて立たせようとした。が、腰どころか足にも力が入らないらしく立てない。墮天使を見たショックだとは思うが、全身震えながら恐怖に見開いた眼でミシュレを見る姿は尋常ではない。

「ミシュレに何かされたのか？」

今までずっと苛められてきて、恨む気持ちがないわけではない。だがこんな場面で恨み言を言うつもりはないし、彼女の様子を見てその気持ちすら吹っ飛んだ。

ざっと見たところ怪我はしていないようだが……。

「氣に中<sup>あ</sup>てられたのでしよう。慣れない者が墮天使を前にすると気圧されますから」

ミシュレを油断なく睨みながら薫が言う。

確かに体育館倉庫でその姿を見た時は優雄も圧倒された。その時の事を思い出して身体をブルリと震わせると、笑う気配がした。

「そいつはユリウスを苦しめていたのだろう？ 何故守ろうとするのか、理解に苦しむ」

見ると男の顔には苦笑めいたものが浮かんでいた。馬鹿にするかと思ったが、意外だ。

「それが人間というもの。あなた達墮天使には分からないでしょうね」

薫はまた何かを呟き、掌に光を集める。それが魔法だという事はもう理解しているが、慣れないせいか違和感がつきまとう。

(何なんだ・・・これ・・・)

だが今は考え事をしている場合ではない。

優雄は木内の腕を持ち上げると、自分の肩に回して身体を支えた。いつもなら肩がちよつと触れただけでも「キモイ」と黴菌扱いだが、今は抗うどころか素直に歩き出す彼女に苦笑してしまう。

「ハッ！」

薫が手に集めた光をミシユレに向けて放つ。体育館倉庫で見たものよりも威力が強く、眼を開けていられないほどに眩しかった。

だがそれほどの力をもつてしても相手には全くと言っていいほど効かず、手の一振りで光を弾き返されてしまった。

「きゃ・・・っ」

返ってきた光が地面を抉り、その衝撃で薫は軽く飛ばされてしまった。

「やはり私程度の攻撃魔法では・・・優雄様！」

彼女の悲鳴に振り返った優雄が見たものは、薫には目もくれずこっちに向かつてくるミシユレだった。

「その女、私の姿を見たからには消しておくか。奴隷にする価値もない。ユリウス、お前は生かして連れて行かなければならないからな。早くこっちに来い」

そう言つて腕を伸ばしてくる。言葉を向けられたのは優雄だったが、反応したのは木内だった。

「何であたしが殺されなきゃいけないの！？ 全部あんなのせいなんでしょ！？」

どうやらミシユレに対する恐怖より怒りが上回ったらしい。

いつもの高飛車な言い方に戻つて怒鳴り散らす。

「だったらあんたが何とかしなさいよ！ あたしは関係ないんだか

ら！」

それまで支えていた身体が全てを拒絶するかのように暴れ出す。偶然、彼女の腕が優雄のこめかみに当たった。そのせいで眼鏡が吹っ飛び、視界がぼやける。

「チツ、騒々しい女だ」

「・・・ひっ！」

ミシュレから発せられる威圧感が増し、逃げようとしていた木内は怯えて動けなくなった。怒りで紅潮していた顔色が、サーツと青くなっていく。

このままでは彼女は殺されてしまう。

そう思った優雄は震える身体に鞭打ち、一步踏み出して彼女を庇うように背にした。

「・・・理解に苦しむ」

ミシュレがボソリと呟いた言葉はどこか寂しそうだった。優雄はそれを不思議に思いながらも、ぼやける視界の中、必死にミシュレを睨んでいた。

（俺だって自分がこんな事をしてるなんて信じられないよ・・・）

普段の気弱さはどこへいった、と自問したい。

ミシュレはいい加減嫌になったのか、自分の羽を一本取ると鋭く投げ付けた。黒い弾丸となった羽は優雄の顔の横を通り過ぎ、後ろの木内へ。

「きゃあああ！」

慌てて振り向くと、頬を押さえて泣き叫ぶ彼女の姿が。

「あたしの顔が・・・！！」

押さえる手の間から血がぼたぼたと流れている。どうやらかなり深い傷らしい。あれでは治ったとしても痕が残るかもしれない。

「なんて事を・・・！」

思わず優雄が叫ぶと、ミシュレはフツと鼻で笑って再び羽を構え

た。

「ダメ！」

優雄が反応するより速く飛んだ羽が木内に届く直前、彼女の身体が突き飛ばされた。突き飛ばしたのは薫だ。代わりに薫の腕に羽が突き刺さる。

「つつ・・・！」

「薫！」

傷を押さえてくずおれた彼女の身体を支え、顔を覗き込むと辛そうに唇を噛んでいた。無理に羽を抜く事も出来ず、優雄はミシユレを睨む。

「貴様・・・！」

「悔しいか？ 女一人守れない自分が腹立たしいか？ だったら強くなる事だ。昔のユリウスのように」

腕の中の温もりを守るように抱き締めながら、優雄はグツと唇を噛み締めた。

みんなしてユリウス、ユリウスと煩い。俺は俺だ。俺は彼女を・・・薫を守りたい。強く・・・強くなりたい！

「もう手加減はなしだ。その二人は殺す」  
そう言っミシユレは手に光を集め始めた。薫のような呪文はない。

・・・そうだ。呪文がない。

先程感じた違和感はこれだ。

(・・・違和感？)

何故そんなものを感じるのか？ 自分は魔法の事は知らないはず・・・

その時、ふと脳裏に何かが過った。これは・・・旋律・・・？

## 5 俺が魔法を使ったそうです。・・・覚えてないけど。

少しの間ぼんやりしていたようで、腕を引かれる感触にそちらに視線を向ける。

「お逃げください・・・っ、私の事は構わず・・・！」  
傷が痛むだろうに、必死に優雄を守ろうとしている。

優雄は口元に微笑を浮かべると、大丈夫というように彼女の柔らかな髪を撫でた。驚いたように眼を見開く薫を優しく横たえて、ミシュレと向き合う。

「私と来る気になったか？」

掌に圧縮された光が辺りを照らし、熱を発している。さながら太陽を眼の前にするが如く。だが優雄は表情一つ動かさず、口を開いた。

「関係がない人間まで巻き込むな。お前に連れて行かれずとも、こちらから出向く」

「ほう・・・」

ミシュレは眼を細めて優雄をジッと見た。

「・・・だが、そいつを生かしておくつもりはない。妖精はもう役に立たんぞ！」

手の光が放たれた。背後の木内へと。

「ひっ・・・」

木内は頬の痛みを忘れて蹲るように頭を抱えた。光が彼女の身体を焼き尽くそうとしたその時・・・

バシン！

何かが弾かれるような音がして、木内は恐る恐る顔を上げた。

「・・・え・・・？」

木内の周りに透明な膜のようなものが張られていた。それが墮天

使から放たれた光を弾いたらしい。

「け、結界・・・！？」

驚きの声を上げたのはミシュレだ。

「妖精がやったのではない・・・まさか・・・」

優雄はミシュレの視線を受けて微笑んだ。そして彼に背を向けると、呆然と自分を見ている木内の眼前で膝をつく。

「大丈夫。その傷、痕も残さずに治せるから安心するといい」

そう言って右手を彼女の頬にかざす。手から淡い光の粒が放たれ、木内の頬が見る見るうちに治っていく。

その間、木内は優雄の顔を正面からジッと見ていた。

眼鏡を外した素顔を見るのは初めてだった。いつも俯いていたためにどんな顔をしているのかさえ知ろうとしなかった。それを今、後悔している。なにせ彼の素顔は今まで見た事がないと言っても過言ではないほど綺麗な顔をしていたのだ。

木内にだっけ憧れの人はいた。その一番カッコいいと思っていた彼よりも上回る美貌に間近で見つめられて、心臓が破裂しそうなほどドキドキと高鳴っている。

（ウソ・・・何でコイツ、こんなに美形なワケ・・・？）

しかもその美青年が自分に微笑みかけているわけで。

今の状況も忘れて、彼女はポカンと優雄の顔を見つめ続けた。

「これでいい」

優雄が手を退けると、木内の頬は傷痕もなく綺麗になっていた。

次は薫だ。

同じように透明の結界が張られた中で横たわる薫の腕に、右手をかざす。

「優雄様・・・」

「じっとしているんだ」

起き上がろうとする彼女の身体を優しく押さえ、腕の傷も治療し

た。

二人の治療が終わると、優雄は再びミシュレに向き直る。

ミシュレは優雄が二人の傷を癒すのを見ているだけで、邪魔しうとはしなかった。

「・・・ユリウス」

ミシュレがボソリと呟く。

優雄はゆっくりと彼に近付くと、その腕をとって魔法を発動した。即ち、空間転移の魔法を。

「アイヴズに伝える。こっちから会いに行くと」

「・・・待っている」

ミシュレを中心に、風と光が舞うように渦を巻く。まるで昼間の如く明るく照らすその中で、渦の回転が速くなり、次の瞬間には墮天使の姿は消えていた。

「優雄様！」

背後から薫の声が聞こえる。

振り返ろうとした優雄は、突然視界が真っ暗になり、意識を失って倒れたのだった・・・

「う・・・」

「気がつかれましたか？」

頭上から薫の声。眼を開けると、彼女の顔がすぐ目の前に・・・

「うわっ!？」

優雄はがばつと飛び起きた。どうやら倒れた自分を介抱するために膝枕をしてくれていたらしい。

「あれ？ 俺、どうなったんだっけ？」

何故倒れていたのか。少し前までの記憶がすっぱり抜けている。

「覚えてらっしゃらないのですか？」

「うん・・・薫が魔法を使った事までは覚えてるんだけど・・・」

「あ・・・」

「ん？」

突然薫が頬を赤くするので、優雄は何か変な事を言ったか、と焦る。が、それは違った。

「また、私の名前を呼んでくださいましたね」

「名前？」

「はい。なかなか呼んでくださらなかったで、私の事お嫌いなのかと思っております。ですが先程も私の名を呼んでくださいました。心配してくださったのですよね？」

「そ、そうだったかな？」

なにせ先程までの記憶がないのだ。薫の事を嫌っているわけがないが、ほとんど無意識に彼女の名を呼んでいた事が気恥ずかしい。

「覚えていないという事は、ご自分が魔法をお使いになった事も覚えていないという事ですか？」

「俺が・・・魔法を・・・？」

はい、と頷く薫。だがどうも記憶がないせいか実感がない。

「そういえば、薫の魔法を見て、何か違和感を感じたんだ」

その後だ。自分が自分でなくなったのは。

「違和感・・・ですか。それは当然だと思います。魔法は魔法でも私達妖精が使うものと天使や堕天使が使うものは別ですからね」

「別？」

「はい。私達は呪文を唱える事によって発動します。天使達は歌によつて発動するそうですが、実際に歌わなくても発動できるそうですから、それだけでも違いますね」

「そうか・・・」

違和感の意味は分かったが、それを感じたという事はユリウスの生まれ変わりだという話を信じてもいいかもしれない。

「ちよつと！」

そこで甲高い声が割り込んできた。

「あれ、木内さん？」

「あれ？ じゃないわよ！ 二人だけの世界作って！ あたしの事すっかり忘れてるでしょ！」

はい、その通りです。

なんて口には出せないの、優雄も薫も口を噤む。

「ワケ分かんない話してないで、ちゃんとあたしにも説明しなさいよ！」

学校中に響き渡りそうなほどの大声で怒鳴りながら優雄と薫の間に身体ごと割り込んでくる。それまでの優雄に対する態度からしたら、驚愕に値する行為だ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

説明をしると言われても。

薫は関係のない者にまで話すつもりはないし、優雄はやつと先程信じ始めたところなのだ。だが彼女は自分のせいで巻き込まれてしまったのだから、説明するべきだろう。そう思い、薫の方を見ると口元を動かしていた。相変わらず理解できない言葉だが、呪文だという事は何となく分かった。

「ごめんなさい」

そう一言謝ると、薫は指を木内の額に当てた。途端に彼女の身体が崩れ落ちる。

「うわつと・・・」

頭を打たないように支えて、ゆっくり横たえる。鼻からは規則正しい呼吸音が聞こえた。眠っているようだ。

「しばらくすれば眼が覚めます。その頃には先程までの記憶は忘れているはずですよ」

「そうか・・・」

魔法って便利。薫、すごい。

思わず心の中で称賛する優雄である。

「では今のうちに帰りましょう」

「帰るって・・・俺の家にか？」

彼女が向かおうとしたのは優雄の自宅に向かう道。

てつきり元の世界に戻ると思っていたのに。

・・・何故そう思ったのか、自分でもよく分からなかったが。  
「勿論ですよ？ 他に寄る所があるなら仰ってくださいね」

ニツコリ笑う彼女が、本当に優雄を大事にしてくれているのがよく伝わってきた。本当は一刻も早く元の世界に連れ帰りたいだろうに。だから優雄は決心した。その決意を口にする。

「・・・薫。元の世界に戻ろう」

「・・・！」

薫は言葉を失ったかのように口を手で押さえる。

彼女が驚くのも無理はない。普段の優雄ならば、元の世界に戻りたいなどと言うわけがないのだ。それを知っていて、彼女も無理に連れて行こうとはしなかったのだ。

「ここにいたってミシユレみたい他に堕天使が来るかもしれない。そしたらまた無関係の人が巻き込まれるかもしれない。そんなの俺は嫌だ。良い思い出はあまりなかったけど、死んでほしい人間なんて誰一人いないんだ。・・・俺がこんな事言うの、可笑しいか・・・？」

あまりにも喜色を湛えた眼で見てるものだから（というか涙まで浮かべている・・・）つい気恥ずかしくてそっぽを向いてしまう。しかも彼女が何も言わずに優雄の胸に抱き付いてきたので、顔が真

っ赤になっっている事請け合いである。

「は、早く行こう！ 早く！」

平静を保とうとしても声が上擦っついては意味がない。今の優雄は相当可笑しな人になっっているだろうが、薫は笑わないでいてくれた。本当に優しい、良い子だ・・・

「私の手を握ってください」

「はいっ？」

ほろりと感動している時にこのセリフ。つい声が裏返ってしまった。

（恥ずかしがってる相手に何を・・・っ）

「空間転移魔法であちらの世界に向かいます。手を離さないようにお願いします」

あ、そういう事が・・・。一人で勘違いして突っ走って、何やってるんだか・・・。

思わず溜息を吐く優雄である。

「？ どうしました？」

「な、何でもない、何でも・・・」

可愛く首を傾げる彼女の手を慌てて握る。男とは違って柔らかい感触がなんとも気持ち良くて、動悸が激しくなりながらも安堵した。（別の世界に行くって、少し怖いしな・・・）

気弱な部分が治ったわけではないので、戸惑いはある。手の震えに気付いていても薫が何も言わずに力強く握ってくれるから、「やっぱりやめよう」なんて言わずに済んでいるのだ。

「行きますよ？」

なんだかファイナルアンサー？ と訊かれたような気分だ。

優雄は躊躇いを振り払うようにコクリと大きく頷いた。

## 6 異世界で会ったのは『大阪のおばちゃん』でした。・・・あれ？

「着きましたよ」

薫の言葉に、優雄はゆつくりと眼を開けた。

空間転移とやらは慣れないうちは気分が悪くなりそうなほどの不思議体験だった。身体と心がずれるような感覚、とでも言えばいいのだろうか。足元がグラついているような感覚が残っていて、眼を開けた途端に眩暈に襲われる。

「だ、大丈夫ですか？」

ふらついた身体を支えてくれた薫に礼を言い、改めて周りを見回す。

「・・・森？」

辺りは木と草と花ばかり。一面緑だらけで、ここまで生い茂っている場所を、今まで見た事がない。柔らかく差し込む陽光が木々の間から零れている。そのおかげか、空気が綺麗でとても心地いい場所だった。

何だろう。何か懐かしいというか、安心する。

先程までいた日本ではこんな場所など見た事がない。探せば自然が残る場所はあるだろうが、少なくともこの森と同じものは存在しないだろう。

それほどに清浄な空気に満たされた場所だった。

・・・というか、夜じゃないのか。

向こうの世界では夜だったが、こっちの世界ではまだ朝らしい。別に眠くはないので問題はないが。

「ここは清浄の森と呼ばれています。魔獣は入り込む事が出来ない

ので、昔の人間はこの近くに街を作ったのです。今ではたくさんの人間が暮らしています」

ここから少し歩いた所にある街に向かうのだと言うので、優雄は彼女の後をついていった。

「清浄の森、か。名前の通りの場所なんだな」

優雄が今まで見た事がない花が咲いていた。とても可愛い小さな花だ。見ていると心が癒されそうだ。中にはバラに似た花も見つけたが、棘がないし香りも優しくて花の妖精だという薫のような花だと思った。・・・恥ずかしくて彼女には言えないが。

「そういえば優雄様、木内さんの事があつて忘れておりましたが、見えているのですか？」

「え？」

「視力が悪くて眼鏡をかけていらっしやったのでしょう？」

「あれ？」

思わず自分の眼元をペタペタと触つてみた。やはり眼鏡がない。確か眼鏡は木内さんが暴れた時にどこかに飛んでったような・・・そこまで考えて、ハツと気付く。

「何で見えてんだ!？」

そうなのだ。眼鏡がなければぼやけて目の前の物の判別さえ難しいほどだったはずの視力が、どういうわけか回復していた。

「魔法か？ 薫、俺に何かしたか？」

勢い込んで訊ねると、ビックリしたように眼を瞬いた薫が首を横に振る。

「私は何も・・・むしろご自分でなさったのでは？」

「自分で？ そんな事出来るわけないだろ。俺は魔法も使えないのに・・・」

「ですが、ミシュレを魔法で追い返したのは優雄様ですよ？」

・・・そうだった。自分には記憶がないので何とも言えないが、

薫と木内の傷を治して墮天使を追い払った事は彼女から聞いていた。それなら自分で視力を何とかしたのかもしれない。

「・・・魔法すごいって感心すべき？」

「ご自分の力ですのに・・・」

あくまで自信なさげに呟く優雄に、薫は苦笑混じりに溜息を吐く。

「ああ、もう少しで見えてきますよ」

そう言っただけで指で差した先に、木々の切れ間から光を反射して輝く壁面が見えた。つい眩しくて一瞬目を閉じるが、瞼を持ち上げると開けた視界いっぱいには真っ白な建造物が立ち並んでいた。中央に見えるのは一番大きくて立派なお城。その周りを城下町というやつが、たくさん市の街を取り囲んでいる。

「綺麗だな・・・」

ポツリと呟くと、薫が同意するように深く頷く。

「この街は百年前から変わっていません。天使を象徴する白を基調に、昔の人間はこの街を平和のシンボルとして作ったそうですよ」

「そうか・・・」

白く輝く建造物に見惚れながら、優雄は思った。平和を願いながらも墮天使の強襲に曝された人間の悲しみを。そして・・・人間の拒絶を形にした街を見る、墮天使の切なさを。

「・・・え？」

優雄は自分で自分に問い返した。

（俺、何で墮天使の肩を持つような事考えてんだ・・・？）

一人首を傾げていると、並んで街を見ていた薫が「解除」と呟いて本来の姿に戻った。掌に収まるほど小さい彼女が、優雄のためにずっと頑張ってくれていたのだと思うと、愛しさも一人である。感激のあまり泣きそうになっていた優雄は、先程疑問に思った事はすっかり忘れてしまった。

「ようこそ、平和を象徴する白亜の街、カエラスへ」

綺麗な虹色の羽を動かしながら飛ぶローズ（薫の事だ）の案内で、優雄は城に向かっていった。城までは城下町を通るため、人々の好奇の眼がピツタリとついてくる。悪気がないのは分かっているが、どうも落ち着かない。

「ローズさま！」

突然聞こえてきたのは高く幼い声。四、五歳ぐらいの可愛い女の子だった。

転びそうになりながらも一生懸命走ってローズのもとまでやってくる。

「ローズさま！ ウェンね、泣かなかったよ！ 待ってる間、泣かなかったよ！」

「偉かったね、ウェン」

女の子のリングのように赤い頬を小さい手で撫でてやりながら、ローズが笑う。

「ユリウスさまは？」

小さく首を傾げる姿はとても愛らしい。

キュンとなった胸を押さえながら、優雄は自分はロリコンじゃない、ロリコンじゃない、と心の中で強く念じていた。

「こちらがユリウス様よ。今は優雄様と仰るの」

ローズに促されて女の子がおずおずと見上げてくる。ぱつちりとした大きな瞳に、好奇心と緊張の色が見て取れた。

「優雄様。この子はウェンディと言って、私のお友達です」

紹介されたウェンディは行儀良くぺこりと頭を下げた。

こんなに素直で行儀が良い子供が日本にいたろうか・・・少なくとも自分の周りにはいなかった。

優雄は膝について子供の目線に合わせると、微笑を浮かべて「よろしく」と挨拶した。するとともに赤かった頬が益々朱に染まる。眼鏡がない素顔はあのいじめっ子の木内でさえ押し黙ったほどの

美形なのだ。幼いとはいえ、女の子が見惚れるのも無理はない（口ズ談）。

ポーツと見惚れている彼女の頭を撫でていると、向こうから「ウエンディ！」と名前を呼ぶ声がした。

「勝手に行っちゃ駄目って言ってるだろ！ 転んで怪我したらどうする……の……」

どうやらウエンディの母親のようだ。彼女はウエンディを注意しながら連れて行こうとしたが、優雄を見てピタリと動きを止めた。

「……あの？」

黙ったままの母親を不思議に思っ て声をかけると、ハッと我に返ったように眼を瞬かせた彼女は、素早くボサボサの髪を整えた。

「やだよ、こんな美形にこんな姿見せちまって……恥ずかしいよ」

顔を赤くしながら服まで整え始める。

見たところまだ二十代後半だと思う。若いのだから自分を綺麗に見せたい気持ちは理解できるが。

「恥ずかしくないですよ。頑張っている姿じゃないですか。とても魅力的です」

そのままでもいい、という気持ちで言ったのだが、彼女はさらに顔を真っ赤にして埃を払うようにバタバタと服を叩いている。さすが親子なだけあって、赤くなっている顔はそっくりだ。

「ハイネ。こちらはユリウス様の生まれ変わりである優雄様よ」

「ええっ！？ ユリウス様の！？」

苦笑混じりのローズの紹介に、ウエンディの母、ハイネは驚愕して、赤い顔から一転真っ青になってしまった。

「も、申し訳ありません！ まさかユリウス様の生まれ変わりの方だとは思わず……し、失礼いたしました！」

娘の頭をグイッと掴んで一緒に頭を下げる。だがそれ以上に慌てたのが優雄だ。

「やめてください！」

と大声を出してしまった。周りから視線が集まる中、逃げ出した  
い気持ちを抑え込んでゆつくりと口を開く。

「何も失礼な事なんてされてませんし、俺はあなた方と同じ人間な  
んです。頭を下げられるほど偉いわけじゃない」

「ですが・・・」

「普通に接してください。俺はまだ十七歳の子供なんですから」

やっと頭を上げてくれたハインがジツと優雄を見上げてくる。そ  
の眼に尊敬の色が見えたので、駄目か・・・？ と優雄は不安にな  
る。が、それは無用の心配だったようだ。

「そうかい？　じゃあ普段通りでやらせてもらうよ。どうも私にや  
敬語は無理っぽいからねえ」

実にあっけらかんと言われて、拍子抜けしたほどである。

さっきまでの緊張は一体・・・

傍らからクスクスと笑い声が聞こえて、そちらを見るとローズが  
肩を震わせて笑っていた。

「・・・ローズ、分かって黙ってただろ」

「す、すいません。ハインは見た目は若いですが、中身はもうおば  
さんみたいな感じで・・・。何と言いましたか・・・ああ、『大阪  
のおばちゃん』に近いです」

「・・・これまた分かり易い表現をありがとうっ」

惘然とした優雄だが、おかげでみんなの肩の力が抜けたのか普通  
に声をかけてきてくれたのでまあよしとしよう。

カエラスの人達は基本的に明るく陽気な人柄らしい。まさにロー  
ズが称した『大阪のおばちゃん』だ。だが城に近づくにつれてその  
物々しい警護に緊張が高まっていく。

「お城って事は・・・王様がいたり、とか？」

「はい。この国を治めるアリウス公がおられます」  
「・・・・・・・・」

そんな人に会ってか。庶民の俺に会ってか。・・・ぶっちゃけ勘弁してほしい。

そんな心の声を読んだのか（っていうか顔に出てる？）、ローズは優雄の肩に止まって頬を撫でてくれた。

「大丈夫ですよ。アリウス公もカエラスの人間ですよ？」

つまり明るく陽気で『大阪のおばちゃん』風だと。

「・・・別の意味で辟易しそうだ・・・」

ボソリと呟くと、ローズは腹を抱えて笑ってくれたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7676y/>

---

約束～天使より堕天使～

2011年11月27日18時11分発行